様式 C-7-2

自己評価報告書

平成　23 年　5　月　19　日現在

機関番号：26401
研究種目：若手研究（B）
研究期間：2008 年度～2011 年度
課題番号：20720006
研究課題名（和文）　ミュンヘン・ゲッティンゲン学派の実践哲学に関する研究

研究課題名（英文）　The Study of Practical Philosophies in the Munich-Göttingen School

研究代表者　吉川 孝（YOSHIKAWA　TAKASHI）
高知女子大学・文化学部・講師
研究者番号：20453219

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：哲学　哲学・倫理学
キーワード：哲学　倫理学　現象学　行為　価値　責任　感情

１．研究計画の概要

この研究は、現象学に属するミュンヘン・ゲッティンゲン学派の実践哲学を明らかにし、現代哲学のなかで正当な評価を与えることにある。ミュンヘン・ゲッティンゲン学派の特徴としては、必ずしも理論哲学の問題に限定されず、倫理学や美学にも強い関心を向けたことがあげられる。実践哲学というテーマを軸にしてミュンヘン・ゲッティンゲン学派にアプローチすることは、現象学のなかにおける実践哲学の可能性を探ることになる。

この研究においては、「感情」、「行為」、「意志」などのトピックを取り上げて、それらがミュンヘン・ゲッティンゲン学派のなかでどのように扱われていたのかに注目する。そのうえで、フッサールを中心とする現象学をつねに意識しながら、そのなかでの同学派の位置づけを明らかにする。

２．研究の進捗状況

（1）現在のところ、ミュンヘン・ゲッティンゲン学派を正面から取り上げた研究としては、フォン・ヒルデブラントの行為論に関する論文を発表することができた。そのほかにも、シェーラーの感情の現象学、ライナッハの行為の現象学、プフェンダーの意志の現象学に関する研究を行っており、今年度に公刊予定の著作に盛り込まれる予定である。

（2）ミュンヘン・ゲッティンゲン学派の拝啓となる現象学的倫理学へアプローチする試みを、論文や学会発表などで展開することができた。とりわけ、フッサールとの比較研究は、順調に進んでおり、実際の成果としても結実している。とりわけ、他の研究者との交流を踏まえながら、シンポジウム（現象学・社会科学会）やワークショップ（日本倫理学会、日本現象学会）を開催できた。そこでは、筆者はミュンヘン・ゲッティンゲン学派やフッサールの倫理学についての研究を行い、他の関連分野の研究者と意見交換する場となった。

（3）上記のような研究の進捗状況のなかで、ミュンヘン・ゲッティンゲン学派の実践哲学を研究するにあたっては、その背景にある現象学的倫理学との関連が重要であることが明らかになってきた。そのためには、研究計画の立て直しと研究期間の延長が必要になってきた。そうしたことを踏まえて、本研究を発展させるために、「現象学的倫理学とし

てのミュンヘン・ゲッティンゲン学派の研究」（基盤 C）として新たに科学研究費に申請し、採択されることになった。

３．現在までの達成度

②おおむね順調に推移している。

当初の研究計画はすでに実行しており、本年度中に出版予定のものを含めれば、その成果を公表することもできる。研究を推進するなかで、現象学的倫理学との関連づけという課題も生じてきたが、今後新たな科学研究費のテーマに受け継がれ、そのなかで取り組むことが可能になった。

４．今後の研究の推進方策

平成 23 年度より本研究は廃止され、このテーマは「現象学的倫理学としてのミュンヘン・ゲッティンゲン学派の研究」（基盤 C）として継続されることになる。これまで以上に、現象学派のなかでの位置づけという点に焦点を合わせた研究を展開する予定である。そのために、他の研究者との情報交換をしながら、現象学的倫理学の全体像を意識したうえで、ミュンヘン・ゲッティンゲン学派の特性を明るみに出して行きたい。

５． 代表的な研究成果

〔雑誌論文〕（計４件）

①吉川孝「フッサールはどこまでアリストテレス主義者か――ヘイナマー教授の講演に寄せて」現象学年報』第 24 号、日本現象学会、13－18 頁、査読なし、2008 年 11 月。

②吉川孝「何が善いのか―フォン・ヒルデブラントにおける善さの担い手の問題―」（査読付）、『フッサール研究　特集フッサールと初期現象学』第７号（電子ジャーナル）、フッサール研究会 15－23 頁、査読あり、2009 年３月

③吉川孝「生き方について哲学はどのように語るのか　現象学的還元の「動機問題」を再訪する」、『現代思想　総特集フッサール　現象学の深化と拡大』Vol.37-16、青土社、51－56 頁、査読なし、2009 年 12 月。

④吉川孝、八重樫徹「訳者解題：評価と行為の現象学　形式的および実質的な価値論と実践論」『現代思想　総特集フッサール　現象学の深化と拡大』Vol.37-16、青土社、29－34 頁、査読なし、2009 年 12 月。

〔学会発表〕（計３件）

①吉川孝「現象学的行為論の可能性――フッサールとミュンヘン・ゲッティンゲン学派の場合」　日本現象学・社会科学会、第 25 回大会シンポジウム「現象学的行為論の可能性」、提題発表　武蔵大学、2008 年 12 月 6 日。

②吉川孝「認識と責任」、第 60 回日本倫理学会ワークショップ「生と責任をめぐって――現象学的倫理学の現在――」2009 年 10 月 16 日。

③吉川孝「フッサールにおける理念の問題」、日本現象学会ワークショップ、「フッサールと超越論的観念論」、東京大学、2010 年 11 月 28 日。

〔図書〕（計１件）

①伊藤直樹・齋藤元紀・増田靖彦編『ヨーロッパ現代哲学への招待』、梓出版、担当：「フッサール――現象の相のもとに」、105−125 頁、2008 年６月。